

# 第1章 島の概況

## 第1節 位置・面積・気候

西表島は、北緯24度15分～25分、東経123度40分～55分の東シナ海に位置する。島の最高峰の古見岳(海拔四六九・五メートル)を中心に、等距離の点をつないでいくと、県境や国境を越えた地球上のその位置が再認識できる(図1)。

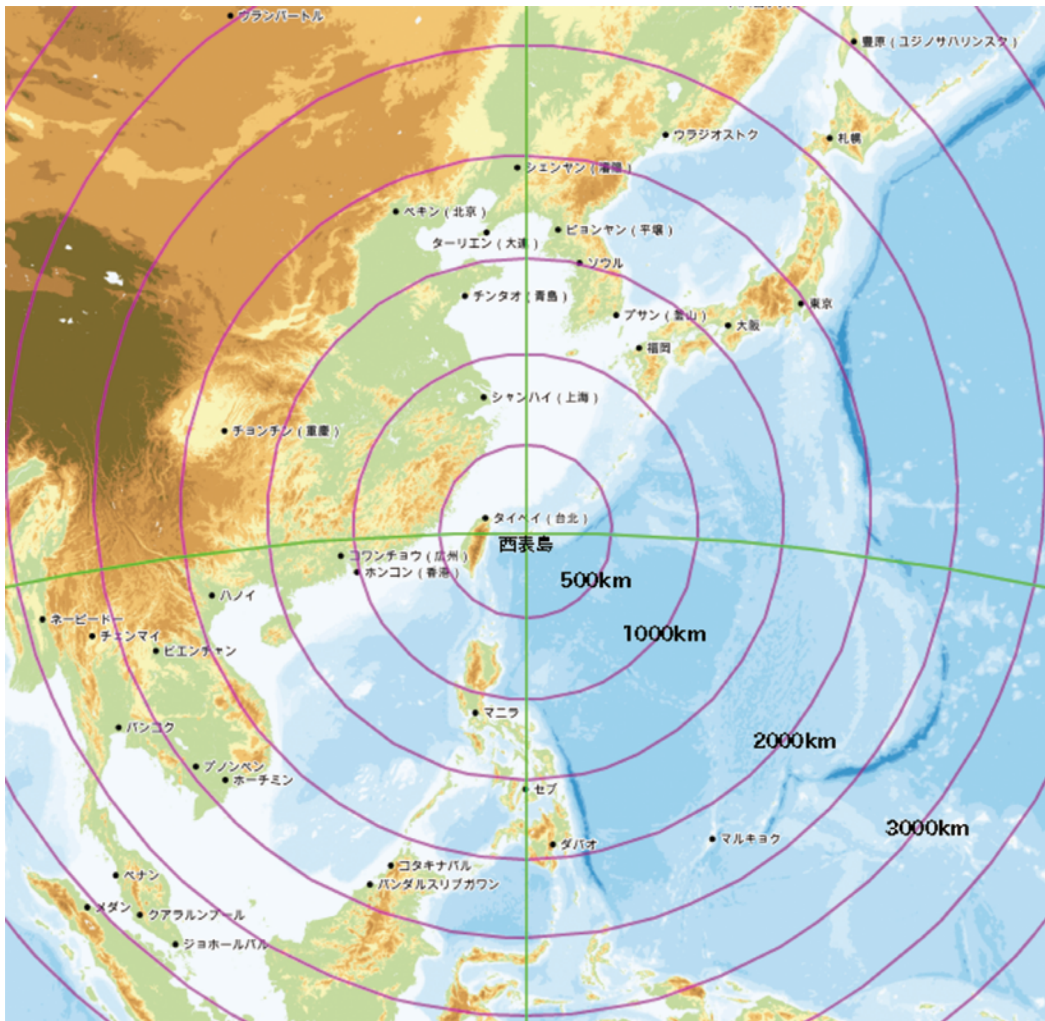


図1 西表島を中心とした地図

<http://user.numazu-ct.ac.jp/~tsato/webmap/sphere/concentric/> を改変。

250キロ圏内に、歴史文書で「両先島」と呼ばれた八重山・宮古の島々と、台湾の50年間の植民地時代にはもっとも身近な都会であった基隆や台北が入る。500キロ圏内には、首里城と、琉球王国が「琉球館」をおいた福建省の福州がある。1000キロ圏内は、北には黒潮洗う琉球弧(沖縄・奄美・トカラ・種子屋久)の島々を包み込み、南には17世紀始め、庶民の主食サツマイモを福州経由で沖縄島にもたらした

ルソン島がある。そのすぐ外側に琉球と奄美を支配した薩摩(鹿児島)と、15世紀の漂流で八重山・宮古の暮らしを初めて報告した済州(チェジュ)島がある。2000キロ圏の東京は、八重山在来稲の故地のひとつと伝承される「安南」(ベトナム付近)よりも遠い。3000キロ圏の根室や羅臼あたりは、島の料理に欠かせない昆布の産地だが、ミクロネシアと東南アジアの島々や、ヒマラヤ山脈、モンゴル高原までが等距離に広がっている。このような地図を通して、西表島がその自然も文化も東アジアと東南アジアにまたがり、大陸と島々と大海原とを結ぶ位置にあることにあらためて気づかされるのである(図2)。



図2 雲南省の彝(イ)族の土地神の仮面(左)と八重山の盆のアンガマの仮面(右)

直線距離で2000キロを距てて、うり二つである。どのような文化交流の結果かは不明だが、口の形、翁の1本歯や髪型など細部まで類似していて、とうてい偶然の一致とは思われない。左は昆明の雲南民族博物館で、右は石垣島で安溪遊地撮影。

西表島は、沖縄県では沖縄島に次いで二番目の面積をもつ八重山群島最大の島である。長径約29キロ、短径約23キロの平行四辺形をなしており、海岸線の出入りの多い周囲は130.0キロメートルあるという。面積は、289.62平方キロで(国土地理院、2018年度調べ)、957万の住民がいる東京23区の面積626.7平方キロの半分弱である。西表島は、全島の約70%が海拔200メートルを越える山岳地帯であり、低地は東部を中心にごくわずかししか分布しない。島のほとんどが第三紀砂岩層からなっているため浸食を受けやすく、山地は沢のいくんだ複雑な地形となって、亜熱帯林に覆われている。

西表島は年間を通じて温暖多雨で、亜熱帯海洋性気候である。年平均気温23.7度、年平均降水量2304.9ミリ、となっている(1981年から2010年の統計)。西表島測候所の資料によると、湿度は年平均80パーセントと高く、樹木に覆われた山中では降水量、雨量ともに集落のある海岸付近よりは高い。風向

は9～3月は北東風、4～8月は南風の日がもっとも多い。風速は年平均秒速4.0メートルで、3～9月の平均風速は秒速3.3メートルで比較的穏やかである。10月～12月は平均秒速5.1メートルと強く、海は時化る日が多い。もっとも暑い7月の最高気温は32.1度、もっとも寒い1月の最低気温は16.3度であるが、風雨にさらされると体感温度では寒く感じられる日もある。台風の襲来は7～11月中旬である。干満の潮位差は最大200センチを越える。

島を横断して西部に流れる浦内川(延長18.8キロ)と東部に流れる仲間川(延長7.45キロ)等の河川流域は、古くから水田の適地として利用されてきた。河口には亜熱帯性のマングローブ林が大規模に広がり、山岳地帯を覆う亜熱帯性の多雨林はみごとなものであり、イタジイやオキナワウラジロガシを主体とする照葉樹林が潜在植生である。赤道付近に分布の中心をもつ植物も生育している。日本列島では西表島にのみ産する植物が10余種を数え、十指に余る種がイリオモテの付く標準和名をもっている。動物相もきわめて豊富で、特別天然記念物に指定されているイリオモテヤマネコが1965年に初めて学界に紹介された時は20世紀最大の発見と言われた。このほかにも国指定の天然記念物となっている動物は、セマルハコガメ、カンムリワシ、リュウキュウキンバトなどがある。このように学術上貴重な西表産の動物は多い。昭和47(1972)年には島の中央部を中心に約1万2506ヘクタールにわたって国立公園に指定され、平成19(2008)年に、石垣島を合わせた西表石垣国立公園となっている。西南部の崎山湾・網取湾の約1077ヘクタールの海域は、環境省の指定する自然環境保全地域の中で全国唯一の海域特別地区となっている(2013年8月24日『八重山毎日新聞』)。

## 第2節 地名

西表島のことを島のことばではイリムティという。西表島は周辺の島々からイリムティ、イリムトゥなどと呼ばれているが、竹富島ではシューヌンと呼んでいる。竹富島の民俗研究家上勢頭亨(うせせど・とおる)氏によれば、これは「下の国」を意味するシム・ヌ・フンの転じたものであるという。西表の語源については諸説があり、新井白石は「南島志」のなかで、石垣島の最高峰、オモト岳より深奥にある島の意味であるとして、入表の字を当てている。「ウムティ」とは、すなわち「顔」であるとする説もある。

東恩納(1950)によれば、この島は古くは所乃(そね)島と呼ばれ、ついで姑彌(こみ)島となえられたが、島の西半分を指すのには、「西の方」を意味するイリムティという言葉を用いていた。乾隆36/明和8(1771)年の大津波によって東部の古見が大きな被害をうけて衰微したあとは、西側を指すイリムティが島全体を指すように変化したと推定している。

人頭税時代には、新城島、竹富島、鳩間島など周辺の島々の島民は、西表島に通って水田耕作をした。戦時中の西表島への強制疎開によって、多くの戦争マラリアの被害者を生んだ歴史や、戦後の西表島への移住、現在では西表島からの海底送水を受けることなど、周辺の島々は西表島との深いつながりの上に生活を成り立たせてきたのである。このような歴史的な経過で、現在残されている西表島の地名は、周辺の島々の島ことばによるものも多い。

西表島の地名は、通い耕作と移住の歴史を反映した多様な島ことばの表記が難しいことと、廃村の地名が失われたことなどから、不正確な表記がされているものが多い。ここでは表記にあたっては、カタカナを基本とするが、西部でよく聞かれる、のどが震えず強い息とともに発音されるカ行・サ行・タ行・ハ行・パ行の無声有気音は、ひらかなで(例、カトウラ K'atura 浦内川河口付近)、息が鼻にぬける鼻音もひらがなで表記した(例、サキヤムラ Sakyā:mura 崎山村)。また、東部では、「う」を発音するときの舌のかま

えで、唇だけを「い」と同じに横に引く、中舌(なかじた)の母音があり、これは「イウ」などと示すことにする(イーシウダヒ I:sɪdahi 南岸の高峰、南風岸岳の東部での呼称)。

ここでは、小島と岩の部、川の部、山の部にわけて示している(図3)。



図3 西表島の主要地名

安溪(1986)による。1400項目の地名を含む最新の地図は、西表をほりおこす会が「西表島の地名と生物文化データベース」をネットで一般公開している。アドレスは、<https://aiiriomote.wixsite.com/mysite>

地名の記録にあたっては、新珍健(大原)、西大舛高一(大原)、次呂久弘起(古見)、慶田城勇(上原)、与那国茂一(浦内)、黒島英輝(干立)、黒島寛松(干立)、星勲(祖納)、宮良全作(祖納)、宮良孫勇(祖納)、仲立孫次(船浮)、山田武男(網取)、川平永美(崎山)、屋良部亀(鹿川)(括弧内は集落名、敬称略)をはじめとする多くのみなさんのご指導を受けた。

### 1 小島と岩

あうばなりじま アウ離島

西表島の東北隅にある無人島。島ことばではアウという。野原崎から150メートル程離れた海中にある小島で、面積が0.048平方キロの、草原に覆われた小島である。国土地理院発行の5万分の1および2万5千分の1地形図に「ウ離島」とあるのは誤りである。古見の人々はアウジマと呼んできたが、西表島西部はアウ バナリまたはアウシマと呼んでいる。たんにアウと呼ばれることもある。新城島からみると横たえた三味線の形に見えるため、新城島の人々はサンシン ヤマと呼んでいる。地名の由来は不明であるが、島ことばで「対になること」をアウというので、祖納の郷土史研究家星勲氏は「西表島と向かいあっている」ことを示すのではないかと述べている。仲松(1977)は、沖縄島と久米島の奥武(オー)地名に注目し、オー(あるいはアウ)地名は「青」が語源であり、他界を表すものではないかと述べている。西表のアウは仲松氏の指摘されたオー地名と、大きい島のすぐ傍らに位置する小無人島という点が共通している。西表島のなかでもこの一帯は古生層からなり、岩の色がほかの場所と異なっているため、北岸の中央部にある赤離島と対にして青離島と呼んだという可能性も捨てがたいと思われる。竹富島や古見の人が畑として利用し、ヤギも放飼していたが、現在では放棄されている。

#### あかばなりじま 赤離島

島ことばではアハ バナリという。西表島北岸の小島。宮良(1930)では、この小島に接する岬をアカバナリザキと呼んでいる。鳩間島の島ことばでは、ガバナリという。アハ バナリは赤い離れ島の意味で、岩が赤みを帯びているための命名である。ここからユツン川の所までは波が荒く、昔の大型船である三反布船でも沖のほうを通ることが難しかった。そのためリーフの岸边沿いには航行用の溝が掘られこの溝は現在も残っている。このあたりは西表島西部のもっとも東側にあたり、西部の人々がここまで来るときは、網を刳り舟に積んで、魚やタコを獲り、赤離の洞窟アハバナリヌイヤーに寝泊りしたものであったという。

#### あつくじま アトク島

西表島西部の浦内川の河口に屹立する島。島ことばではアトクという。頂上部をリュウキュウマツに覆われた岩山状の小島である。大小2つの島からなり、最高地点の海拔は42メートルである。島ことばでは大きい方をウブ(大)アトク、小さい方をグマ(小)アトクと言っている。西表島西部の島ことばでアトクというのはウミウのことである。北海岸の鳩離、舟浮湾内のシカブソーヤ(アジサシ類がとまる岩の意味)などと同じように鳥がとまっていることによる命名かもしれない。また、元々はアテイクと発音され、舟の航行の目印(山あて)に用いられたことからという伝承もあり、明治18年に西表島を探検した田代安定の残した地図(台湾大学図書館蔵)には、「アテク」と記されている。アトク島は浦内川の河口が昔の大水で切れ、現在のような流れになった時に両岸から切り離されたと伝承されている。浦内御嶽の至聖所であるイビはウブアトクの頂上にあるとされている。海賊キッドがこの島に財宝を隠したといううわさで、大正時代に宝探しのブームが起こり、そのときに全島くまなく掘り返された。アトクが「宝島」というあだなをもつのはこのためである。そのときに、島の頂上の窪地に生えていたフクギも切り倒されてしまった。アトク島は、浦内川の河口のみごとなマングローブ帯の景観にひときわ色を添えている。

#### うちばなりじま 内離島

西表島西部に属する無人島。島ことばではウチバナリという。周囲5.14キロ、面積は2.13平方キロと、有人島である鳩間島の2倍以上ある。最高点は194.1メートルである。全島が山勝ちで、雑木に覆われて

いる。地名の由来は「内側にある離れ島」という意味で、外離島と対になっている。祖納では内離島をナーレーと呼ぶこともあるが、これは雍正7/享保14(1729)年に元成屋崎から内離島に移転した成屋村の名前で島全体を呼んでいるのである。島の南端の南風(はい)坂(さか)を島ことばでマイザシというが、ここは炭坑時代に非常な繁栄をみせた集落であり、西表島初の郵便局もここに建てられていた。強制的労働に従わされた坑夫たちによって、内離島は戦前の一時期、八重山群島中で最大の人口密度(1平方キロあたり480人)を記録したこともある(東恩納、1950)。成屋村の周辺にはナーレー タおよびマイダと呼ばれる水田が作られていた。雍正6/享保13(1728)年にリュウキュウイノシシが内離、外離両島から駆逐されて以来、この2島は祖納村のもっとも重要な畑作地帯となり、第2次世界大戦の直前まで耕作されていた。

#### うびらいし ウビラ石

西表島西南部の海岸に位置する巨岩。島ことばではウビラ イシという。大正10年発行の5万分の1地形図には「ウビラ岩」と書かれている。崎山半島のパイミ崎と落(ウティ)水(ミ)崎の中間にあり、標高200メートルを越える急斜面が続く海岸線から海中に突出したテーブル状の巨大な1枚岩である。70メートル4方ほどの平坦な上面は、山側から海側に向かって高くなり、海側は切り立った崖になっている。風化作用によってウビラ石の上面にはいちめん魚の鱗のような模様が刻まれている。この模様が西表島西部の島ことばでウビラ イユと呼ばれるベラ科の大魚メガネモチノウオの鱗とよく似ていることから、西表島の人々はウビラ石の命名の由来をこのウビラ イユに求めている。星(1982)によれば、ウビラ石の東方約2キロのクーラと呼ばれる地点付近の、海に面した斜面に人頭税制度開始(1637年)以前に滅びた小村落「ウビラ村」があったとされ、「大平村」の漢字が当てられている。この「ウビラ村」の集落跡は、現在までのところ確認されていない。ウビラ石から落水崎にいたるサンゴ礁は、島の西部からも東部からも遠く離れているのでめったに人が漁をしないため、豊かな漁場である。ウビラ石は、東側のクーラの海中に立つ巨岩、波照間喰石(パティランファイシ)とともに、波の荒いこの近海を航行する漁師にとって大切な目印となっている。

#### ほかばなりじま 外離島

西表島西部に属する無人島。島ことばではフカ パナリという。面積は1.35平方キロ、最高地点は149.0メートルである。急傾斜の海岸線を持ち、雑木とススキに覆われた島である。地名の意味は、「外側の離れ島」ということで、内離島と対になっている。フカ パナリのことを祖納ではパネーということがある。「慶来慶田城由来記」(石垣市総務部市史編集室編、1991)によれば、15世紀の八重山の群勇の1人であった慶来慶田城用緒(けらいけだぐすく ようしよ)は、祖納に住む以前には、外離島の「野底辻」という所に住んだと伝えられているが、これはヌスク ティチ(頂)であり、島の東北隅のヌスク崎の上の要害の地を指しているものと思われる。西側の高地をバンヤ(番屋)と呼び、旧藩時代にはのろしによって通信を交わす所である遠見番屋(火番盛ともいう)が作られていた。外離にはウタ、ムタなどの祖納村の水田もあり、傾斜地はすべてサツマイモやアワの畑にされていた。祖納に伝わる古謡「仲良田節」はここでできる粟の稔りをたたえて「離頂ヌ粟」と歌っている。島の東側のサンゴ礁で夏場にツノマタ(ハタメンキリンサイ、島ことばでイゲシまたはイシ)という海草が採集され、西表島西部の人々にとって大切な現金収入源になっていた。

### なかのおがんじま 仲御神島

西表島の南西約15キロの洋上に浮かぶ無人島。島ことばではナニ ワンまたはナリ ワンという。周囲およそ3キロ、面積は0.38平方キロしかないが、標高は102メートルもあり、全周が切り立った崖になっている。荒海に囲まれた砂岩の岩山には木も生えておらず、近寄り難い印象を与える。カツオドリ、オオミズナギドリ、セグロアジサシ、クロアジサシが繁殖し、その他の海鳥もきわめて多い。これらの海鳥は西表島の島ことばでナニワン グーグー(鳥)と総称されている。時として「沖の神島」などと書かれるのは誤りである。宮良(1930)にはナカ ヌ オンと記録され、仲之御嶽島という字があてられている。この島を西表島西南部の崎山村では、ナリ ワンと呼んでいたが、この地名には「流れ御神」という意味があるという。崎山村出身の川平永美氏が伝承しておられたところによると、むかし、崎山の南の海岸に面した急傾斜地にあったピラドーという村でのこと、何日も大雨が続いたある日、沖から島が漂って来るのを1人の男が見つけた。驚いた男が大声をあげて他の村人を呼んだところ、流れ島はその場で止まってしまった。ピラドー村の人々は、南の海から神様が流れて来られたのだと信じて、この島に「ナーリウガン」と名付けた。これがのちにナリ ワンと発音されるようになったという。尖閣列島での鰹節製造業で名高い古賀辰四郎は、明治19(1886)年にこの島を借地し、羽毛と鳥の糞の採集事業を興して、大正中期まで断続的に事業をおこなっていた。戦前まで西表島の人々は割り舟をこいでこの島にでかけ、島の東端のニシバリ(西割)に舟を着け、中央部のナカムリ(中森)に登って鳥の卵を採集してはもちかえり、食用にしていた。卵の採集は与那国島からも行われていたという伝承がある。崎山のヌバンの浜にはこの島への航海安全を願う拝所があった。現在は全島が国の天然記念物「仲の神島海鳥繁殖地」に指定されている。

### はてるまくいし 波照間喰石

西表島西南部の海中に屹立する巨大な岩。島ことばでは《ぱティラン ファイ イシ》という。ウビラ石と落水崎の間に位置している。上面は平らで、山側から海に向かって高くなり、岩の上部が突き出して怪物が口を開けているように見える。この口が、真南の波照間島を喰うように見えるのでこの名前がある。波照間島には逆に西表島を向いた岩があり、この岩に喰われるのを防いでいるという。むかし、鹿川村の人々がこの岩の近くのページという所に魚捕りに来て、そこで出あったワニをこの岩の上で殺したという伝説がある。漁をする時に場所を知るかっこうの目印となるため、沖縄島出身の糸満漁師などもこの岩の名前を知っていて、糸満の言葉でハティルマ ケージと呼んでいる。

### はとばなりじま 鳩離島

西表島北岸の沖の無人島。島ことばではパトゥ バナリという。加治工真市氏によれば、鳩間島では、老年層はパトゥ マレー、壮年層以下はホート バレーと呼んでいる。インダ崎の北西約2キロにあり、樹木に覆われている。その名のとおり、鳩(島ことばでパトゥ)がきわめて多い島で、ここから飛び立った鳩が鳩間島の畑に多くの被害を与えたこともあるという。鳩間島のカツオ漁が盛んだったころには、西表島にも近く、燃料の薪にことかかないため、ここに鰹節製造工場が建てられたこともある。民謡「鳩間口説」にも歌われている。

### ぴさいし ピサ石

西表島西南部のユクイ頂(チチ)の南の海岸にある巨岩。島ことばではピサ イシという。ウビラ石の約1キロ北東にあたる。上が平たいのでピサ(平)石という。ピサ石の上方は急傾斜地で、ピサイシ カーラと

いう小川が流れている。この川を登りつめると、ウツムリという崎山廃村の水田跡にでるが、この水田の南側にピラドー ムラという古い集落址がある。山側には墓も点在しているという。石の名前をとってピサトゥ ムラをピサイシ ムラともいう。大竹祖納堂義佐(おおたけそないどう ぎさ)という西表島の英雄が与那国島を成敗したとき、殺された亡霊たちが復讐のためオオコノハズク(島ことばマヤ チコー)の群れとなって西表島を襲い、ピサトゥ ムラの人は老婆1人を残して全員が食い殺されたと伝えられている。

#### まるまぼんさん マルマ盆山

西表島西部の小島。島ことばでは《マルアあ》という。祖納集落の西側の前泊の浜から200メートルほど沖にあり、樹木に覆われている。地名の由来は「小さくて丸い島」ということであろう。祖納に伝わる「まるま盆山節」は、島に群がる白鷺や仲(なか)良(ら)川、外(ほか)離(ばなり)島から帰る農民の舟といった情景を歌っている。

#### やっさじま ヤッサ島

西表島東部、仲間川の河口付近の川の中にある平坦な島。島ことばではヤッサ ジマという。新城島の島ことばでは、ヤッシュー シイマといい、島の西を流れる仲間川支流もヤッシュー ガーラと呼んでいる。地名の由来は不明である。笹森儀助が明治26(1893)年に仲間村を訪れた時にすでに廃村となって久しい「やっさ村」の跡を見ている(笹森、1982-3)。昔、ここには古見村の牧場があり、ヤッサ マキと呼んでいた。リュウキュウイノシシの被害が少ないため、後には畑を拓く人もあった。昭和29(1954)年に大原集落の住民が中心になって石垣市、東風(こち)平(んだ)村などからの移住者によって10戸の開拓集落が建てられ、昭和39年(1964)には橋がかけられた。

#### ゆぶじま 由布島

西表島東部の美原(みはら)集落の東側にある島。島ことばではユブという。周囲は2.15キロ、面積は0.13平方キロである。西表島とは砂地の浅瀬でつながっており、干潮時には歩いて渡ることができる。ユブの地名の由来はよくわからない。もともとは、対岸の与那良(よなら)川一帯の水田を通い耕作するための竹富島民の泊まり場所であった。昭和23(1948)年に戦争からの引揚者を中心に集落を作ったが、昭和37(1962)年に対岸に引っ越して美原を建てた。現在、由布島では観光用の亜熱帯植物園が経営されている。

## 2 川・滝

#### あいらがわ 相良川

西表島東部、古見集落の北海岸に注ぐ川。古見における島ことばはアリラ カーラという。長さ3.95キロ、流域面積は4.60平方キロ。河口付近はマングローブ帯となり、その面積はおよそ26ヘクタールである。すぐ南を流れている後(しい)良(ら)川と比べて小さい川でありながら、河口が狭いため非常に氾濫しやすく、鉄砲水がよく出ること知られている。相良は当字であり、地名の由来ははっきりしない。ただし、アリラのアリには「荒れ」という意味があり、「ラ」は西表の河川に普通の語尾であるから、元来は「荒れ川」という意味であったとも考えられる。マングローブ帯の上流は古見の水田で、ウキンダ、スバル、ウラタバル等の水田地名が残っている。コンクリート製の相良橋が昭和56(1981)年に竣工した。



#### あだなでがわ アダナデ川

西表島西部の仲良川右岸の支流。島ことばではアダナデ カーラという。流域面積は3.00平方キロ。仲良川の河口から数えて2番目の支流であるため戦前の炭坑時代に「二番川」と呼ばれたこともある。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「あたんなて川原」と記されている。川が仲良川に注ぐ付近のマングローブ帯の後背地はアダナデという場所で、川に沿って祖納集落の放棄水田が分布している。アダナデの地名の由来は不明である。すぐ上流にはウラダという水田の跡があり、昔は星岡炭坑の坑口があった。ウラダの付近の仲間川一帯を《びナキ》と言い、仲良川でもっとも浅い所である。小舟で仲良川沿いの水田耕作に通った時代は航行の難所であった。

#### あまごいよど 雨乞い淀

西表島西部の仲良川上流の地名。島ことばではアミクイ ユドゥという。星(1981)によれば、むかし、宮古島の首長、仲宗根豊(トゥイ)見(ミ)親(ヤー)の命令で西表島から材木を切り出すことになって、西表の農民達は仲良川の奥へかりだされた。苦心さんたんして仲良川の支流のナーミチ川に材木を集め、これを流し出すために雨乞いをした淀がこのアミクイ ユドゥである。3日間の雨乞いのあとようやく大雨が降ったところへ豊見親が死んだという報せが届いた。人々は狂喜して、集めた材木をすべて投げ捨て、アヨウという古謡を歌いながら舟をこいで村に帰っていった。材木を捨てた所をトゥイミヤー パラというが、これは「豊見親柱」という意味である。「慶来慶田城由来記」(石垣市総務部市史編集室編、1991)には「とよめや柱川原」とある。アヨウをうたった谷間はアユバン(アヨウの谷)といわれている。西表の人々はのちのちまで雨乞いの儀式にはこのアミクイ ユドゥに潜り、沈んでいる材木を切り取って神に捧げたという。

#### あやんだがわ アヤンダ川

西表島西南部の川。島ことばでは、アヤンダ カーラという。東側のウダラ川と平行して北に流れ、網取湾に注ぐ。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「東山田川原」と記されている。アヤンダという地名の由来は不明である。アヤンダ川のはるか上流の、南岸に面した台地上に鹿川廃村の下田原水田地帯があり、そのなかのウヤンダ、クヤンダという水田地名に関係があるとする意見もある。河口付近の西岸の山中にはアヤンダ、アブタという網取廃村の水田があった。上流部は《ピサあ カーラ》といい、崎山廃村へ向かう支流はアザンザ カーラという。

#### いぬぬびしがわ イヌヌピシ川

西表島西南部、舟浮湾に注ぐ川。島ことばでは、イヌヌピシ カーラという。水落(みずおち)滝のかかるピーミチ川とクイラ川の間。河口付近はウジェラ カーラという別の名をもっている。沖縄県河川課発行の河川管内図には「フカイ川」とあるが、これは北側を流れる別の小川である。イヌヌピシとは、「犬が丸くなって寝ている」様子を表す島ことばである。戦前は、舟浮から鹿川村へ通じる山道があつて、イヌヌピシ ミチと呼んでいた。

#### うたらがわ ウタラ川

西表島西部の浦内川右岸の支流。島ことばではウタラ カーラという。浦内橋の約700メートル上流に河口をもっている。島の南西部の網取湾にそそぐウダラ川としばしば混同される。「八重山嶋由来記」(竹

原孫恭家文書)には「大田良川原」とある。ウタラの意味は不明であるが、昔から干立村の水田があり、浦内川沿いの水田地名の1つである。戦前の炭坑時代のウタラには丸三(まるさん)炭鉱の宇多良鉱業所があり、貯炭場、納屋とよばれる坑夫の宿舎、野田鉱業主の豪邸や炭坑倶楽部までが立ち並んでいた。ウタラには今もレンガ造りの廃墟や坑夫の墓が残っている。2010年に宇多良炭坑は近代化遺産群に認定され、ここで亡くなった坑夫たちの慰霊のための「萬骨碑」を建立し供養祭が挙行された。

#### うだらがわ ウダラ川

西表島西南部の川。島ことばではウダラ カーラという。宮良当壮『八重山語彙』には「ウタラ ガーラ、舟浮と網取との間を流るる川」とあるが、これはウダラの誤りであろう。西側のアヤンダ川と平行して北に流れ、網取湾に注ぐ。河口付近にはマングローブ帯が発達する。河口の東側の海岸沿いには網取廃村の水田跡が広がっており、この水田地帯もウダラと呼ばれていた。上流1キロほどは舟で遡ることができる。この川に沿って崎山や網取から鹿川廃村へ向かう旧道がつけられていた。南と東からの2本の支流が合わさる所をウファラシユクといい、南に続く上流部はウファラシユク カーラと名前を変える。ただし、現在ではウバラシユクと発音する人が多い。ウファラシユクは河原がやや広くなっており、人頭税の時代に見回りの役人を駕籠に乗せて運んだおりの休み場所だった。鹿川に伝わる「大原越地(ウファラ クイチ)節」は、このウファラシユクを越えて来る役人の駕籠を迎える歌謡であって、ウファラとは役人に対する敬称、シユクは「休み所」の意味である、と網取出身の山田武男氏は伝えている。「大原越地節」には鹿川村へ越える道の途中に「ユサバザ」という峠を越えて行くと歌われているが、網取や鹿川の人々は、この峠をユサザと呼んでおり、「大原越地節」を歌う時にも、「ユサバザ」でなく「ユサザ」と歌ってきた。ただし、「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には、「よすはさ川原」の名が見えているから、「ユサバザ」という地名がまったく間違っているとも言い切れない。

#### うらうちがわ 浦内川

西表島西部に河口をもつ川。西表島西部の島ことばでは河口付近をカトゥラ ミナトゥ、河口より少し上流のあたりをウラダ ミナトゥといい、中流域はイナバ カーラと呼び分けていて、この川全体を表す島ことばは存在していない。長さ18.8キロ、流域面積59.24平方キロという値は全琉球列島で最大である。河口での川幅は約300メートルあって、そこから上流11キロの地点まで航行可能である。30トン級の船でもおよそ10キロまで遡ることができる。河口から15.50キロは2級河川の指定を受けている。流量も大きく集中豪雨のあとで毎秒60トンという値が記録されたことがある。河口付近には、島ことばでウブ ミナトゥ(大湊)と呼ばれる約117ヘクタールの広がりをもつマングローブ帯が分布し、干立地区にかけて広がるマングローブ帯と合わせると、その総面積は145ヘクタールにも達する。兩岸に広がる亜熱帯の原生林はみごとである。船着場(イナバ ヌエーラ)には、軍艦石と俗称される岩があって、この地点から上流は潮の満干の影響をうけない溪流となる。西表島西部では河川の感潮域をミナトゥ、潮の影響をうけない溪流をカーラと呼んで区別している。この両者の接点が船着場になることが多いが、この接点のことを島ことばではエーラと呼んでいる。浦内川という名称は河口の東側にある浦内村に由来するものと考えられる。カトゥラは、右岸の河口付近に広がる浦内村の水田地名に由来する。川沿いには水田が多く分布しており、ウラダとは浦内川沿いにある干立 浦内両村の水田地帯の総称である。ウラダに属する水田として、下流から上流に向けて、右岸にはウタラ、タカピシ、タダラ、ウムトゥ、メバラ、左岸には、シキト、シマ

ドウ、シンマタ、ウブドウなどの地名が分布しているが、現在は、いずれの水田も放棄されている。ウラダは千立の人々にとって最も大切な水田地帯であった。

浦内川の島ことばによる名前の1つ、イナバ カーラは稲葉(いなば)廃村より上流を指す言葉で、イナバの語源はよくわからないが、神の宿る非常に神聖な地帯であり、むやみに立ち入るものではないとされてきた。

千立村に伝わる伝承によると、昔の河口は現在の場所ではなく、千立の南の与那(よな)田(だ)川《ピサイミナトウ》に開口していたが、あるとき豪雨による大出水があって、現在の河口の所が切れたのだという。河口に屹立するアトク島が陸地から離れたのもそのときのことだと伝えられている。昭和19年の洪水では、稲葉の村が全滅し、溺死者をだすという被害を出している。

浦内川のタカピシの前の深みにはワニがいたという伝説がある。猪を狩りにいった男が村に帰るおりにタカピシから対岸に泳いで渡ろうとして、ワニを恐れて先に犬を渡らせたところ、3匹の犬が次々に水中に引き込まれてしまったと伝えられている。

長さ271.1メートルの浦内橋が昭和45(1970)年に竣工して、西表島西部の人々はそれまでの渡し舟に頼る生活から開放された。現在の浦内川は、川沿いの原生林と上流のマリュドゥの滝などを見るための観光船が多数行き来しており、仲間川とならぶ西表島観光の見所のひとつとなっている。

#### おおみじゃがわ 大見謝川

西表島北岸の川。島ことばでは、オミジャー カーラという。河口付近には300メートルほどの距離を隔てて、西にケーダ川、東にユシキダ川と合計3つの川が開口している。流域面積は2.25平方キロ。地名の由来は不明。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「大め座川原」とある。西表島北岸の川は、急峻な崖状の山地からいっきよに200メートル近く流れ下るものが多く、崖の下には水田が開けていることが多かった。大見謝川河口付近の一带も、戦後まで鳩間島の人々が田小屋を建て、小舟で通って水田耕作をしていた。ケーダ、ユシキダなどはいずれも水田地名である。西表島西部の人は、この川の上流の山に多いホソバタブの樹皮(島ことばでコーガという)を剥いで線香の材料として売ったという。昭和52(1977)年の北岸道路開通によって大見謝橋がかけられた。

#### かんびれーのたき カンビレーの滝

西表島西部浦内川上流の滝。この滝のある場所を島ことばではカンビレーあるいはカンビレという。浦内川上流の「軍艦石」で舟を下りて、約1キロ上流に歩いた所にある、岩盤の露出した河原がカンビレーである。砂岩の岩盤でできた河床の上を流れ落ちる急流を「滝」と呼んでいるが、ほんとうの滝となって落ちている部分はマリュドゥの滝と呼ばれている。カンビレーの流れは河床に多くの甌(おう)穴(けつ)を穿っている。それらの甌穴のなかでもことさら深く、青い水をたたえているものを西表ではアヤチブ ビルチブと呼んできた。アヤチブは「綾壺」の意味であろう。「慶来慶田城由来記」(石垣市総務部市史編集室編、1991)はカンビレーを「かんひらい」、アヤチブ ビルチブを「あやつほへりつほ」と記している。カンビレーの語源は西表の島ことばのカンピライ、つまり「神々が交際する」という意味であるといい(琉球大学ワンダーフォーゲル部、1972)、西表で最も神聖な所として島民に畏怖されてきた聖域である。別の語源説として、カンビレとはカンビリ、つまり「神が座る」から変化したのだと言う老人もある。星(1981)によれば、カンビレについて次のような伝説がある。むかし、西表島に神様が一柱足りないことがわかり、このカンビレーに島の神々が一堂に会して、日本(ヤマトウ)から神を迎えてくることを相談した。アヤチブ ビ

ルチブや「から玉ま玉」のなる木(島ことばトゥカナチキ、和名ハスノハギリ)などが西表島にあるという誘いをうけて、はるばるヤマトウの「のまの美崎」から訪れた神は、しばらくの間、ここにどまったが、やがてウナリ崎に居を移したという。カンビレーは最近までは、島の人々が竹材の採取やイノシシ猟のためにテドウ山に登るときの道の入り口となっていた。現在では浦内川観光の最終目的地として観光客が絶える日もない程のにぎわいを見せている。

#### くいらがわ クイラ川

西表島西南部の川。島ことばでは潮の干満の影響を受ける下流域をクイラ ミナトウといい、上流域をクイラ カーラと呼ぶ。長さは10.68キロで、西表島では浦内川、仲間川に次いで3番目に長大な川で、18.21平方キロの流域面積をもっている。河口から4.20キロは2級河川の指定を受けている。河口での川巾は500メートルもあり、広大なマングローブ帯を擁している。約4キロ上流までは舟で遡ることができ、船着場から南岸の海辺までは尾根1つで隔てられており、水平距離にして500メートルに満たない。「クイ」というのは「越える」という意味、「ラ」は西表島の河川に多い語尾である。西表島西部の祖納 干立の人々が島の南岸に出て鹿川村や南風見村に至る時にこの川の水運を利用して山を越えたところから命名されたものと思われる。「越良川」の字をあてた地図もある。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「久江良川原」と記されている。右岸にはクイラ、ウチキダなどの網取村の水田があったが現在は放棄されている。クイラ川と南岸との間の丘陵地には戦前まで祖納の牧場があって、ウブヌ、トゥムゾー、ウフガチ、《タカあ》、などの牧場地名が残っている。この川はイノシシ獲りの猟師が南風(はい)岸(きし)《パイキン》岳付近へでかけるときのルートでもあった。

#### くうらがわ クーラ川

西表島北岸の川。島ことばではクーラ カーラという。流域面積は0.90キロ。沖縄県河川課発行の河川管内図には「タノラ川」と誤って記されていたことがある。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)では、「小浦川原」という字が当てられている。地名の由来は不明である。河口付近一帯は、戦前まで鳩間島からの通い耕作によって、水田が開かれていた。喜舎場(1977)によれば、上原(うえはら)、船浦 方面で耕作していた鳩間島民が西表島民によって水田を奪われたので新たに開田した良田であった。この新たに開かれた地帯の地名は「鳩間節」では伊武田(インダ)、小浦(クーラ)、福浜(フクハマ)、下離(シザバナリ)と並び称されている。これらの地名は西表の島ことばではインダ、クーラ、ククハマ、シチャバナリと呼んでいる。昭和52年(1977)年の北岸道路開通によってクーラ橋がかけられた。

#### けーだがわ ケーダ川

西表島の北岸に注ぐ川。島ことばではケーダ カーラという。大見謝川の西を流れる。流域面積は1.25平方キロである。国土地理院の2万5千分の1地図に「ゲーダ川」とあるのは誤りである。地名の由来は不明であるが、ケーダは鳩間島から通って耕作した水田地帯のひとつであった。

#### しいらがわ 後良川

西表島東部、古見集落の北に開口する川。島ことばではシーラ カーラという。古見岳の南に水源を持ち、長さは4.80キロ、流域面積は6.98平方キロである。すぐ北に開口している相(あい)良(ら)川のマングローブ帯とつながる24ヘクタールにおよぶマングローブ帯をもっている。河口の東方400メートルの海中

にはミュシクおよび、ピニシとよばれる2つの小島がある。ピニシには平(び)西(にし)貝塚という外耳土器文化に属する遺跡が存在する。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「勢良川」という字が当てられている。島ことばで「シー」は後ろの意味、「ラ」は西表島の川に普通の語尾であるから、地名の由来は「古見の後側の川」という意味であろうと考えられ、古見集落の南側を流れる前(まい)良(ら)川と対になっている。沖縄県河川課発行の河川管内図には、すぐ北側の支流を「後良川(北沢)」という名前で呼んでいるが、古見ではフカーリ カーラと言っている。後良川は、石垣島の宮良(みやら)川などとならんで、八重山でも最も古く橋がかけられた川のひとつである。正徳5年(1715)に延べ3000人以上の人夫を使って、長さ3町11間(約347メートル)におよぶ橋がかけられ(「八重山嶋由来記」竹原孫恭家文書)、大枝(ウフユダ)橋と名付けられた。橋の南側には建造の由来を刻んだ石碑が立てられていたという。後良橋が昭和48(1973)年に竣工した。

#### とらどうるしがわ トウドウルシ川

島ことばではトウドウルシ カーラという。西表島西部、仲良川右岸の支流。水源はウシク森の麓である。河口付近はマングローブ帯となっている。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「ととるき川原」と記されているから、「轟く」というのが地名の由来であろうと考えられる。戦前、炭坑全盛の時代には、仲良川の一番目の支流であることから「一番川」と呼ばれた。「一番川」付近には野田炭坑の事務所や私立小学校である「みどり学園」も建てられていた。祖納の水田トウドウルシタバールがあったが、現在は放棄されている。

#### なかまがわ 仲間川

島ことばではナカマ ガーラという。西表島東南部の川。長さは13.50キロ、流域面積は28.41キロという西表島では浦内川に次いで大きい川である。河口から上流5.50キロまでは、2級河川の指定を受けている。上流へは舟で10キロも遡ることができる。明治17(1886)年頃に西表島を踏査した田代安定は、「西表嶋仲間村巡検統計誌」(国文学研究資料館蔵)において、「浦田川、別名、前川」と記録している。ウラダは西表島西部の浦内川の島ことば名の1つであり、東部と西部でそれぞれ最大の川が同じ島ことば名称をもっていたという可能性を示す資料であろう。上流で溪流に移行するところを新城島の島ことばで、ヤーラヌカンと呼んでいる。河口には小島があり、カラスが多かったことから、「ガラサー森」と俗称されているが、島ことばではパツァイと呼んでいる。河口から約5キロ上流までマングローブ林におおわれ、6種類のマングローブ類が108ヘクタールにわたって広がる。マングローブ帯と山地斜面との移行帯は、150メートルにおよぶサガリバナ群落となっている。このような植物群落はきわめて貴重であるため仲間川流域一帯は国によって「仲間川天然保護区域」に指定されている。上流約4キロの左岸の山手には「ウブンドルのヤエヤマヤシ群落」があり、国指定の天然記念物となっている。この場所は新城島の島ことばではウブンドウリウと呼んでいる。仲間川という地名の由来は不明であるが、現在の大富(おおとみ)集落の所に明治半ばまであった廃村仲間村の名前を付けたものかもしれない。流域には新城島からの通い耕作による水田が多く分布していて、新城島出身の人々はこの川のことをナーメカーラまたはナハメカーラと呼びならわしている。仲間川河口の右岸にあった新城の水田は、大原田(ウバルダ)と総称されているが、パイッシウタダレー、ハティル、ナハディル、ウスリウ、スーダ、ナハユニなどの水田地名を含んでいる。仲間川流域は戦前、西表の材木を切り出す場所として利用され、左岸の西船付(ニシウフナツキ)川には、石垣島や新城島からの帆船が船を着け、北側の山地から建材や薪にするための多く

の木を切り出してきた。現在の仲間川は西表島西部の浦内川とならんで、「日本のアマゾン」というキャッチフレーズで八重山の観光名所のひとつとなっている。

#### なからがわ 仲良川

西表島西部の川。島ことばではナーラ ミナトゥ(下流部)、ナーラ カーラ(上流部)という。長さは8.75キロ、流域面積は23.25平方キロで、河口から5.50キロまでは2級河川の指定を受けている。河口付近のマングローブ帯は約34ヘクタールあり、8キロ上流まで舟で航行ができる。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「名嘉良川原」とある。地名の由来は不明である。仲良川沿いの氾濫原には、広大な湿地が分布しているが、これは戦前の祖納の水田跡である。下流から上流にかけて右岸には《びナキ》、マラナ、ケーダ、キンニバリ、カンダ、フーシ、左岸にはドーラ、シムチ、ヤマツツア、サラミチ、ムトゥグチ、ウタルなどの水田地名が残っている。これらの水田地帯は「仲良田」と総称され、西表島でもっとも豊かな収穫を約束された水田として西表島西部に伝わる古謡「仲良田節」にも歌われている。昭和の始めに蓬莱米と呼ばれる稲の新品種と化学肥料が導入されてからは、他の水田の収穫も安定して、仲良田は胸まで沈むような深田が多かったため、昭和19年の大水害のあとはすべて放棄されてしまった。現在の利用は、むかし水田の縁に植えた竹垣の筍の子を折り取りにゆく程度である。

#### ばいたがわ パイタ川

西表島西南部、崎山廃村の東南に注ぐ川。島ことばではパイタ カーラまたはパインタ カーラという。沖縄県河川課発行の河川管内図に「バイダ川」とあったのは誤りである。パインタとは南側を意味する島ことばで、村の南の方にあるために命名されたものであろう。上流にはマイストーという場所があり、崎山に新村が建てられる乾隆20/宝暦5(1755)年以前の小村落があったと伝えられている。マイストーの近くには千人墓《シンニン ばカ》と呼ばれる墓があって、むかし、疫病で多くの人が倒れたとき、葬る人もないため、大勢の首だけを投げ込んだ所だという伝承がある。

#### ひどりがわ ヒドリ川

西表島西部のクイラ川右岸の支流。島ことばではピドゥリ ミナトゥ(下流部)、ピドゥリ カーラ(上流部)という。流域面積は1.96平方キロで、約10ヘクタールのマングローブ帯を有する。地名の由来は不明である。流域一帯はむかし、舟浮の水田地帯であったが、現在は放棄されている。下流から上流にかけてヤマツツア、パイヌタ、ピドゥリヌタ、シケーラなどの水田地名が残っている。

#### ひないたき ヒナイ滝

西表島北岸の滝。島ことばでは《びナイ サーラ》という。船浦湾に注ぐヒナイ川(島ことばでは、びナイカーラ)にかかり、落差はおよそ45メートルで、琉球列島最大である。ヒナイ川は流域面積3.35平方キロの川で、滝の水量自体は大きくないが、西表島と石垣島を結ぶ定期船から見たヒナイ滝は、白い布をかけわたしたようでみごとである。島ことばでは《びニュー サーラ》という人もある。西表島西部の島ことばで《びニ》は「ひげ」のこと、「サーラ」は「下がったもの」を意味するから、びナイ サーラの語源は「老人のひげのように白く下がったもの」という意味であると言われている。国土地理院発行の5万分の1地形図には鬚川と当字して「ヒナイ」と読ませている。近づくには河口付近の湿地帯を歩かなければならないが、わざわざこの滝の下まで行ってみる観光客も多い。

### ほうらがわ ホーラ川

西表島の北岸に注ぐ川。古見の島ことばではポーラ カーラという。長さは3.20キロで、流域面積は3.13平方キロである。高那(たかな)廃村の所に河口をもつ。西表西部の人はホーラ カーラとっている。近くには焼川という川もあって、ヤキーという名前で恐れられた悪性マラリアが蔓延した土地であることをしのばせている。河口にかけている橋は高那橋という。この川の東側の台地は近年牛の放牧場となっている。

### ふねらがわ フネラ川

西表島の北岸に注ぐ川。島ことばではフニラ カーラという。流域面積は1.09平方キロ。国土地理院発行の2万5千分の1地形図に「ホネラ川」とあるのは不適切である。地名の由来は不明である。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には、「ふめら川原」と記されている。現在はフネラ川とホーラ川に挟まれた一帯が牛の放牧場として利用されている。

### まいらがわ 前良川

西表島東部の川。島ことばではマイラ カーラという。古見集落の南に河口をもち、長さは3.75キロ、流域面積は7.64平方キロである。河口付近はマングローブ帯となっている。地名の由来は後(しい)良(ら)川が古見の後ろに位置するのに対して、「前に位置する川」という意味であろうと思われる。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「真栄良川原」と記されている。康熙54/正徳5(1715)年には延べ3500人以上の人夫を使って、長さ2町6間(約229メートル)に及ぶ三離(ミチャーリ)橋がかけられた(「八重山嶋由来記」竹原孫恭家文書)。橋のもとには架橋の由来を示す石碑が建てられていたという。現在の橋は前良橋といい、1973年に竣工したものである。上流の左岸にはマイラ タという小規模な水田があって、昔は古見の人が耕作していた。右岸の河口付近には、拝所である三離(ミチャーリ)御嶽があり、その奥の至聖所とされている所にみごとな板根をもつサキシマスオウノキの古木が生えている。これは沖縄県指定の天然記念物とされている「古見のサキシマスオウノキ群落」である。ここを訪れようとする場合は、地域住民にとっての神聖な場所であることを意識するべきである。

### まりゆどうのたき マリユドゥの滝

西表島西部の浦内川の上流の滝。島ことばでは滝の名前がないが、滝の下の滝壺をマリユドゥと呼んでいる。圧倒的な水量が特徴で、カンビレーの滝から流れ下る水が2段になって丸い滝壺に落ちこんでいる。木性シダが周囲に林立する長径130メートル、短径80メートルほどの滝壺がたたえる水の色は見る人の心をとらえる。マリユドゥは「丸い淀み」というのが命名の由来であるらしい。星(1981)はマリの語源はマーリ(廻ること)であるとし、滝壺に落ちた水が廻るからと説明している。国土地理院の5万および2万5千分の1の地図に「マリユドゥ滝」と書かれていたりしたが、MA RI YU DUと四拍で発音していただきたい。マリユドゥと対にされているのはカンビレーの上流に位置する長さ4キロにもおよぶ淀で、これはナーユドゥ(長い淀)と呼ばれている。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「稲葉長淀、同丸淀」と記録されている。戦前まではナーユドゥにはオオウナギが多く、泳げばウナギにかみつかれるぐらいであったという。

#### みずおちたき 水落滝

西表島西部の滝。滝自身には島ことばによる名前がつけられていない。クイラ川の河口の西側に開口するピーミチ カーラにかかる滝。滝壺にあたる場所はダウンキと呼んでいる。島ことばの由来は不明であるが、ここは昔から、舟浮湾に停泊する軍艦をはじめとする多くの船が水を補給する所であった。

#### みだらがわ 美田良川

西表島西部の川。島ことばではミダラ カーラという。祖納集落の南に広がるミダラ水田地帯を流れる。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「銘田良川原」と記録されている。地名の由来は不明である。ミダラの水田地帯は現在の西表島西部でもっともよい所とされ、アラガー、シクアイダ、アイダ、ミダラ、カニヨリ、アキサシなどの小水田名をもっている。美田良橋という橋もあるが、これはミダラ川ではなくて北側のアラバラ川にかかっている。アラバラ川からは現在祖納の上水道が引かれ、下流のアーラ水田では、政府の補助によって構造改善事業がおこなわれた。

#### ゆしきだがわ ユシキダ川

西表島の北岸に注ぐ川。島ことばではユシキダ カーラという。流域面積は0.70平方キロ。大見謝川の東を流れる。国土地理院発行の2万5千分の1地形図に「ヨシケラ川」とあるが、これは聞き誤りであろう。西表の島ことばで「ユシキ」とはススキのことである。鳩間島の人が水田の通り耕作をした場所のひとつである。戦後は与那国島の人が何人か開墾のため住み着いていた。

#### ゆつんがわ ユツン川

西表島北岸に注ぐ川。古見の島ことばではユーツン カーラという。流域面積は4.92平方キロ。河口付近はマングローブ帯となっている。西表島西部の人はユーチンと発音し、新城島の方はユーチンと言う。地名の由来は不明である。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「ゆちん川原」と記録されている。東恩納(1950)は「由珍」の字をあてている。この川の一帯をユーツンといい、肥沃な土地として有名であった。雍正10/享保17(1732)年に高那村が寄人政策によって新たに建てられたのもユーツンの沃野と港があったからであると伝えられている。西表島の東部と西部を区分するときの境界はこの川であったという。北岸ではもっとも河口が深い川で、昔から舟を停泊させる港として使われた。西表島西部の人が石垣島まで舟を漕いで通ったころには、この川に舟を入れて1泊したものだという。昭和52(1977)年の北岸道路開通によってユツン橋がかけられた。

#### よなだがわ 与那田川

西表島西部、干立集落の南側に開口する川。島ことばでは河口付近をユナダ ミナトウ、それより上流をピサイ ミナトウという。24ヘクタールにおよぶ広大なマングローブ林に覆われた流域の一帯は、干立東側の丘陵地カナザヤンの麓のヤエヤマヤシ群落、湿地に生えるミモチシダ群落などとともに国指定の天然記念物「星立天然保護区域」に含まれている。島ことばの由来は不明。与那田というのは川の名前というよりは橋の名前で、享保3(1718)年に石造りの橋が渡されて以来の命名であろう。昔の橋が渡されていた場所は今でもイシバシと呼ばれ、左岸には橋をかけた当時の由来を示す漢文の石碑が現在も立っている。嘉慶5/寛政12(1800)年にはこの石碑のすぐ上のあたりに役所で使う紙を作る紙漉屋(カビヤ)が創設された。役人と船浮の美女カマドマとの恋を歌った「殿様節」に「紙屋」と記されているのがここ



である。マングローブ帯の南側にはチクララー、マラントゥなど、東側には浦内川にかけてフカンタ、くモッタ、ミナピシなどの干立と祖納集落の水田が点在している。

### よならがわ 与那良川

西表島東部の川。島ことばではユナラ カーラという。美原集落の北側に注ぐ。流域面積は1.41平方キロ。「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)にも「与那良川原」とあるが、地名の由来は不明である。流域一帯は広大な水田地帯で、古見の人のほかに、人頭税の昔から竹富島の人々が、河口付近の由(ゆ)布(ぶ)島に田小屋を建てて寝泊りして通い耕作をしてきた。現在は、由布からの移住者によって建てられた美原集落の人々がユナラの水田の一部を耕作している。

## 3 山

### うしくもり ウシク森

西表島西部の山地の名前。島ことばではウシク ムリという。3角点があり、高さは363.1メートル。西表島を東西に横切る3つの山塊のうちの祖納岳を経て波(は)照間(てるま)森へ至る途中の稜線にある。ウシクの意味はよくわからないと島の人々は語っているが、西表島ことばではシクには「底」という意味があり、例えば山奥のことをシクヤンと言っている。西表島の～ムリ地名については波照間森の項目を参照されたい。古い地形図には「ウーシーク森」とあり、「ウニシーク森」と記した地図もあったが、これらはいずれも間違いで、黒島寛松氏によれば、昔の地図には正しく「ウシク」と印刷されていたものが、後の人が字と字の間の等高線を文字と見誤った結果であるという。

### うるちだけ ウルチ岳

西表島西南部の網取廃村の背後の山。島ことばではウルチ チチという。高さは223.3メートル。山腹は、リュウキュウマツを主とする2次林に覆われている。ウルチの語源は不明である。チチは網取で山頂を指す言葉である。網取に伝わる民謡「ウリチイ岳節」は、ここにあってと言われる若者達が集う「遊び庭」(アシビ ミナー)を歌っている(喜舎場、1977)。網取から真南に山を越えて崎山村に向かう道をウルチミチといい、この道の南端にある浜を《ウルチ ブぁ》と呼んでいる。国土地理院発行の2万5千分の1地形図では網取の南西の岬を「ウルチ崎」としているが、網取ではこのあたりをピサザシ(平たい崎の意味)と呼んで、ウルチ崎とは呼ばなかった。この混乱を招いた原因の1つは小字名が実際の地名を反映していないことにあるのかもしれない。つまり、ウルチ シチは小字「網取」に属するのに対して、ピサザシは小字「ウリツ」に属しているのである。1971年に廃村を余儀なくされた網取の人々は崎山出身者とともに親睦の会を結成し、この会を「うるち会」と名付けている。

### ござだけ 御座岳

西表島中央部の山。島ことばではグザ ダキという。頂上には三角点があり、標高は420.7メートルである。山頂は矮性のゴザダケササ(島ことばヤマダイ)におおわれている。和名は、この地名によって名付けられたものである。西表島西部の仲良川と東部の仲間(なかま)川の上流にあたる。仲間川沿いで水田を作っていた新城島の人々はこの山をグザ ダヒと呼んでいる。ダキ、ダヒは高い山を指す島ことばであるが、グザという地名は、次に述べるように魚の島ことばと関係があると言われている。西表島にはグザ イユと呼ばれる魚(和名アオブダイ)がいて、この魚が成長すると額の部分が突き出してくるが、その

額の形が御座岳の山頂部分にそっくりであると島の人は語る。ただし、グザ イユとグザ ダキとどちらが先に命名されたかは伝えられていないという。集落から非常に遠いので、山腹から材木を切り出したりイノシシ猟をする猟師が歩くぐらいであまりひんぱんには利用されてこなかった。現在は西表国立公園の中にある。

#### こみだけ 古見岳

西表島東部にある西表島の最高峰。島ことばではクン ダギという。高さ469.7メートル。山頂付近はゴザダケササに覆われている。古見岳周辺には高い峰が連なり、西表島の人々は、これらの山々を八重岳(ヤイダギ)と呼んでいる。古見村の背後にそびえているために古見の名を冠して呼んだものである(東恩納、1950)。民謡には「古見岳、八重岳」と必ず対にして歌われているため、八重岳は古見岳の別名であるという島の人の意見もある。古見に伝わる民謡「古見の浦(クンノーラ)節」は、これまでの研究者は古見の前の海(浦)を歌ったものと考えている(喜舎場、1977)。これに対して西表島の人々は、クンノーラとは「古見の後ろ(裏)」すなわち古見岳を始めとする八重岳を歌ったものだと考えている。

#### そないだけ 祖納岳

西表島西部の山。島ことばでの呼び方ははっきりしない。国土地理院発行の5万分の1および2万5千分の1地形図には祖納集落から1.5キロほど東南の、高さ293.9メートルの峰を祖納岳と呼んでいる。祖納の人々は村から見える山裾の一带を「スネ デー」と呼んできたが、これは地図にある位置より低い、海拔150メートル以下の地帯である。スネ デーとは「祖納の台」という意味であるという島民もいる。スネ デーは長大な猪垣で囲まれており、昔の祖納村の畑用地であった。「慶来慶田城由来記」(石垣市総務部市史編集室編、1991)には、猪垣が完成した乾隆35/明和7(1770)年から「祖納嵩」を開墾したという。ここでは「祖納嵩」は今日のスネ デーを指していると考えられる。民謡には「祖納岳節」があり、「祖納岳」と歌われている。現在スネ デーのもっとも高い所には、テレビ受信 送信塔が建てられている。

#### てどうさん テドウ山

西表島中央部の山。島ことばではティードゥーという。三角点があり、標高は441.5メートル。頂上付近は、広くゴザダケササで覆われている。東恩納(1950)には「手登根山」とあり、「八重山嶋由来記」(竹原孫恭家文書)には「手登古川」の名前が見えている。西表島北岸のマーレー川の上流にはマーレーヌ ティードゥーという別の山があると西表島西部干立の老人は語り、ティードゥーとは、山々のなかでもひときわ高い所を指す言葉ではあるまいかという。ゴザダケササは伝統的な家の屋根の下に敷き詰めるために大量に必要とされ、祖納や干立などの集落から近いテドウのものはよく利用された。テドウのふもとはイノシシの猟場としてもよく利用されている。カンビレーからテドウに登る沢を島ことばでアンピタ カーラと呼んでいる。アンピタとは淡水に棲む巻貝のことだが、まるでアンピタを拾うようにたくさんのイノシシが捕れたためにこう名付けられたという。

#### ともしやま 友利山

西表島西北部の丘陵地。島ことばでは山をつけずに、たんにトゥムリという。船浦集落南西に位置し、標高は105.3メートル。波照間森などと同じ「〜ムリ地名」であろうと思われる。昔、鳩間島や上原村の

人々がここから2キロほど南のウタラ水田を耕作するために泊小屋を作っていた場所。鳩間島の人が建てた拝所があって、友利御嶽と呼ばれていた(星、1982)。

#### はいきしだけ 南風岸岳

西表島南岸の最高峰。島ことばでは、パイキシ ダキという。標高は425.4メートルである。国土地理院発行の2万5千分の1地形図には「南風見岳」とあるが、これは誤りである。南岸の「別れ浜(バハリ パマ)」から登ることができるが、きわめて急な2段になった絶壁を登らなければならない。クイラ川沿いに登れば傾斜は比較的緩やかである。島ことばでは「南」をパイ、「切れている」ことをキシというので、地名の由来は「南側が切り立っている」という意味である。新城島の人々は、この山をイーシウ ダヒと呼んでいる。この言葉の語源はわからない。クイラ川から南風岸岳に至る道筋は、西表島西部の人々がイノシシ猟をするために歩いた地帯で、夜は山頂近くの洞窟パイキシ イリヤーに泊まることもできた。この洞窟には人頭税のころ盗賊が住んでいたといわれ、崎山村や網取村に下りてきては米や牛を盗んだという。この盗賊はパイキシ ヌシツリと呼ばれ、洞窟の前には彼らがクイラ川で取って食べたという、大型の2枚貝シレナシジミ(島ことばでキゾ)の殻がたくさん落ちていたといわれている。

#### はてるまもり 波照間森

西表島西部の山の名前。島ことばでは、パティラン ムリという。標高は447.4メートル。森は当字で、西表島の他の「～ムリ」地名と同じく、山頂部が腕を伏せたように丸くもり上がった地形を指す言葉である。この山頂に登れば眺望がきき、周囲の島々が見える。パティラン ムリは南の方に波照間島が見えるためこの名前がつけられた。祖納集落から尾根を伝って、祖納岳とウシク ムリを過ぎて、波照間森に達する途中には鳩間島が見えるムリがあって、《パトゥワあ ムリ》と呼ばれている。

#### ゆくいちじ ユクイ頂

西表島西南部、崎山廃村の南側の丘陵地。島ことばではユクイ チチという。崎山村の牧場であったユクイ牧(まき)を見下ろす丘の上にあたる。きわめて眺望にすぐれ、晴れた日には波照間島が見える。旧藩時代の方位石(カラパリ)が据えられている。島ことばでユクイというのは「憩い」の意味であり、チチは頂上を指す。崎山の若者達がここに集って遊んだ「遊び端」(アシビ パナ)として民謡「崎山節」にも歌われている。乾隆20/宝暦5(1755)年の崎山新村の創設に際して、波照間島から強制移民で連れて来られた人々が故郷をしのんだ場所であるという。

### 第3節 集落

西表島の集落は、琉球王国の時代からある旧村と、その後の移民によってできた新村がある。琉球王国が名実ともに滅んだ明治12年の後も旧慣を維持する政策によって、宮古とともに移住の自由のない人頭税制度のもとにおかれた八重山では、明治36(1903)年に、人頭税が廃止されると、たくさんの廃村が生まれた。新旧の集落と主な廃村を地図に示す(図4)。

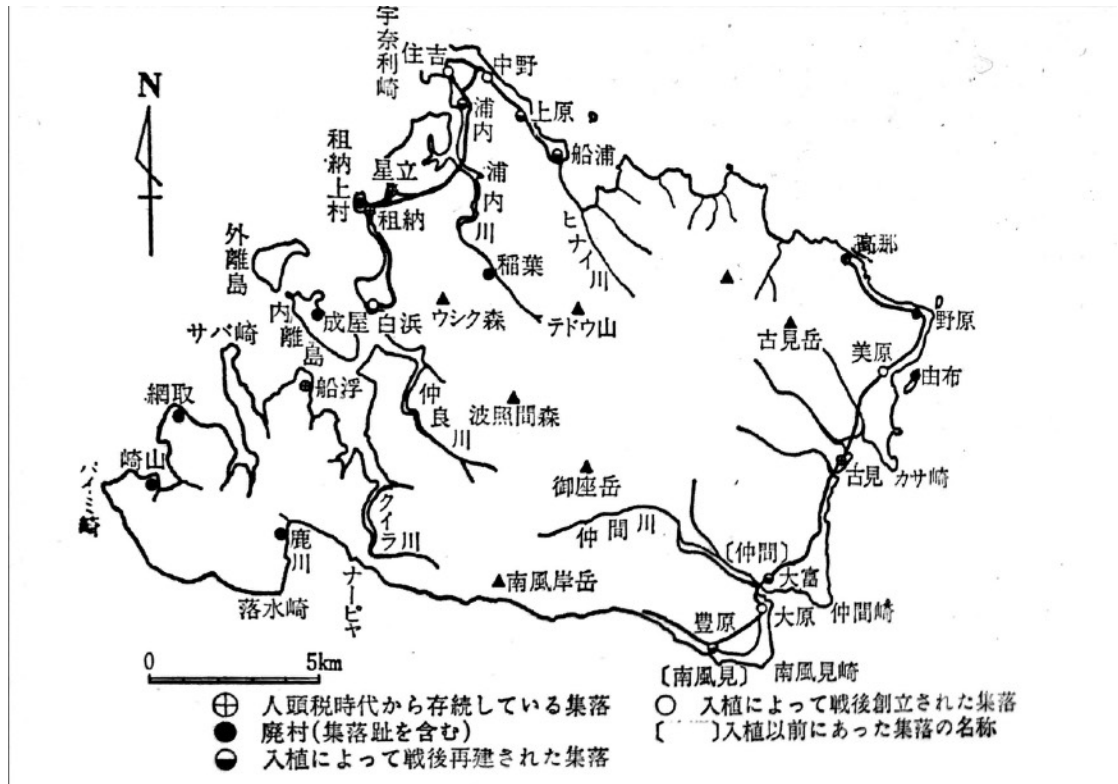


図4 西表島の集落地図

安溪 (1977) による。

昭和39年の竹富町人口動態統計には、東部で、大原、大富、古見、由布、西部で、上原、西表、白浜、船浮、網取の合計9つが地区としてあげられている。平成3年の同じ統計では、それが、東部7地区、西部10地区と、細分されている。この17地区に分け、現在の自動車道に沿い、白浜からは船に乗り換えて、西表島を東南の端から西南部まで反時計回りに順に訪ねてみよう。現在は人が住んでいない集落跡についても簡単に触れることにする。以下の記述は、特記ない場合は、牧野(1972)に従う。島ことばによる呼称がある場合は、かっこの中に列記する。

## 東部地区

### 1 豊原(とよはら)

琉球政府の開拓政策によって、1953年3月に47戸が移民。日本最南端のバス停がある。

近くに南風見(はいみ)村があった。この村は、1734年波照間島から400人を移民させて創立されたが、大正9(1920)年廃村となる。最後の住民からの聞き取りによれば、悪性感冒(スペイン風邪)によって、住民22人のうち20人までが死亡したという。また、戦争中に波照間島からの強制移民によって多くの戦争マラリアの死者が出た場所で、現在は「忘勿石の碑」が建てられている。

### 2 大原(おおはら)

ももとは、サクデーといって、新城島(あらぐすくじま)の出作りの田小屋が並ぶ場所だったが、1938年に新城島からの移民によって集落となった。大原港は、島の東部の玄関口となっている。8月には、無病息災・五穀豊穰を祈る「大原まつり」が挙行される。

### 3 大富(おおとみ)

もとは仲間(なかま)村があったが、明治33(1900)年廃村となった。琉球政府の開拓政策によって、1952年8月に58戸が大宜見村と竹富島等から移民し、一字ずつとってあらたな名前「大富」を付けた。仲間川に面した「仲間第一貝塚」「仲間第二貝塚」は、沖縄県指定史跡である。西表島で唯一の、住民の相互扶助による大富共同売店がある。

ヤッサ。仲間川中流部の島。琉球政府の開拓政策によって、1954年6月に10戸が移民。1972年に民間のリゾート開発計画が発表されたが、農地法の制限によって断念。現在は農地である。

### 4 古見(こみ、クン)

祖納と並んで、西表島でもっとも古い村のひとつ。1609年から11年にかけての薩摩藩の検地では、「こみ間切」と表記され、みつ離・大枝・平西・よなら・平川・ひけ川・崎枝・小浜・鳩間の9村が所属する、八重山の中心地であった。1651年に、古見村は大枝(ウフユダ)・平西(ピニシ)・三離(ミチャーリ)・与那良(ユナラ)の4つの小集落からなると記録された。18世紀の中国側の記録『指南広義』や『中山伝信録』では、西表島全体の呼称として「姑弥」が使用された。琉球王国の時代の造船所があった。1771年のいわゆる明和の大津波で人口の18%にあたる151人が溺死し、西表島の中ではもっとも大きな被害を受けた。その後の人口減少を補うため、琉球政府の開拓政策によって、1954年5月に35戸が移民。民謡「古見ぬ浦(クンノーラ)節」などが、竹富町指定の無形民俗文化財になっている。「平西(ピニシ)貝塚」は沖縄県指定文化財。「古見のサキシマスオウノキ群落」は国指定の天然記念物。現在は、環境省の「西表野生生物保護センター」がある。

花城(ハナグスク)。琉球王国時代、古見村の北側にあった小村。

### 5 美原(みはら)

1969年11月26日の台風エルシーの被害をきっかけに、1971年由布島から移転して創建。

### 6 由布(ゆぶ)

島全体が砂地でマラリアを媒介する蚊がいないため、古くから竹富島から西表島へ通って水田耕作をするための田小屋が建てられていた。1947年頃、十数戸が定着。一時は300人にもなり、美原移転前には19戸があった。1981年に、西表島から水牛車で渡る観光植物園が開園し、現在に到っている。

野原(ヌバル)。琉球王国の時代に、美原と高那の中間の野原崎にあった小村。

### 7 高那(たかな)

1732年、由珍(ユツン)と呼ばれた北岸の平野にあらたな村が創建された。通い耕作が多かったことを踏まえて、主に小浜島から600人以上を移民させた。1738年、それまで古見村に属していた与那良を高那村の一部とした。明治39(1906)年、廃村となり、住民のほとんどは小浜島に帰った。島ことばと日本語を混ぜた歌詞の民謡「高那節」は有名。2012年まで温泉が営業され、現在はホテルがある。

## 西部地区

### 8 船浦(ふなうら、フノーラ)

琉球王国時代の造船所が古見から移転してもうけられた場所。1768年、上原村から12戸が移住して創立したが、さらに、上原村の南側に移転したという。鳩間島から1949年4月に23戸が移住した。上原港に移転するまでは、船浦港が西部の定期船の港だった。「船浦のニッパヤシ群落」は国指定の天然記念物。

### 9 上原(うへはら、ウイバル)

もとは西表村と呼ばれ、1628年にすでに存在した古い村である。1768年、それまでの西表村が上原村と呼ばれるようになり、役所が祖納から上原に移された。新しい上原村には、東祖納、干立、多柄(たから)、浦内、上原の5つの集落が属していた。1854年黒島から150人を移民させたが、マラリアのために人口は減り続け、明治42(1909)年、10戸が鳩間島に移転して、上原村は廃村となった。大正2(1913)年、5世帯が移住を試みたが長続きしなかった。戦時中上原に避難していた鳩間島の人々を中心に、与那国、宮古からの移住者が加わって再建された。現在の上原は、島の西部の定期航路の玄関口である。教訓歌「でんさ一節」のふるさととして「でんさ之碑」の石碑があり「デンサー祭り」が举行される。

### 10 中野(なかの)

戦後米軍が設置した「白浜事業所・上原採炭所」の場所に、職員や家族が移住して、1948年に発足。1950年に炭鉱事業は民間に譲渡されたが、1年ほどで操業中止。残留した人々は農業を営んだ。1960年に中野にパイン工場ができ、61年から65年まで上原と船浦の中間に製糖工場が操業したことで、パインとサトウキビ生産を行った。現在は、竹富町の多目的ホール・中野わいわいホールがある。

### 11 住吉(すみよし)

琉球政府の開拓政策のもと、宮古・八重山両群島政府は、計画移民としては八重山でもっとも早い1948年に宮古の下地島を主体に37戸が住吉開拓団として移民。1961年にパイン工場が、62年に製糖工場ができた。64年の製糖工場閉鎖などで、世帯数は一時減少したが、現在は回復し、毎年10月11日に「入植祭」を行っている。

### 12 浦内(うらうち)

万暦35/慶長16(1611)年の検地には、浦打村として登場する古い集落。明治26(1893)年廃村となり、明治42(1909)年、上原村から鳩間島へ移転した人々の一部が移住して再建されたが、大正15(1926)年頃に、大部分が干立・祖納に移転して再び廃村状態となった。昭和11、2年頃から、宇多良(ウタラ)炭坑、上原炭坑の根拠地として、数百名の従業員を擁した。戦後は丸三鉱業所の野田小一郎の農場で30名程度が働いたが、1948年、中野の米軍採炭所に大部分が移住した。1949年、移住者を迎えてあらたに村を建て、現在に到っている。ジャングルの中にレンガ積みの遺構の残る「宇多良炭鉱跡」が経済産業省の近代化産業遺跡群になっている。日本で初めてのエコツーリズムセンターがある。

稲葉(いなば)。浦内川の上流左岸にあった集落。もともと、浦内川流域の水田の通り耕作が行われた場所の一つ。大正～昭和初期に石炭が掘られ、林業と製材業のセンターとして、昭和13(1938)年

「西表島斫伐所(しゃくばつしよ)」が開設されたが、昭和19(1944)年11月、大洪水によって潰滅した。終戦後、田小屋に定住する人もあり昭和35年頃には15戸程度の家があったが、再びの水害で昭和44(1969)年に無人となった。

### 13 祖納(そない、すね)

古見村と並んで、西表島でもっとも古い伝統をもつ集落のひとつ。1479年5月の『朝鮮王朝実録』には、足かけ3年の漂流から帰還した済州島民の記録があり、現在の発音とほぼ同じ「所乃(ソネ)島」と記されている。民謡「まるま盆山節」に「阿立(アダティ)大立(ウフダティ)御仮(ウカリ)に下原(ソンバレ)真山(まやま、マヤン)落水(ウティミチ)成屋(なりや)船浮(ふなうき)」と歌われるが、はじめの3つは、現在は「上村(ウイムラ)」と呼ばれる半島部分に大正時代まであった村の跡で、次の3つが現在の祖納の区域にあたる小集落、後の2つは海を隔てて祖納に属していた。干立と並んで「節祭(シチ)」の芸能が、国指定の重要無形民俗文化財となっている。茅葺きの「新盛家住宅」は、沖縄県指定文化財。村建ての英雄たちの「大竹祖納堂儀佐屋敷跡」「慶来慶田城翁屋敷跡」、石畳の敷かれた「ピサダ道」は竹富町指定の史跡、節祭ゆかりの「大平井戸(ウヒラカー)」は、竹富町指定の有形民俗文化財である。東経123°45'6,789の子午線が通ることから、「子午線ふれあい館」が建てられている。

成屋(なりや、ナーレー)。祖納の対岸、内離(ウチパナリ)島にあった村。内離島の南端の対岸の元成屋(もとなりや、フナリヤー、のちにはモクタンと通称)という場所から移転したと伝えられる。戦前、炭坑時代の内離島は、沖縄県でもっとも人口密度の高い島であり、南端の南風坂(ハイサカ)には郵便局もあった。現在は牧場となっている。ナリヤランはこの地名から名付けられた蘭である。

### 14 干立(ほしだて、フタデ)

伝承では、西北のイミシク台地から降りて現在の位置に移転した。大正時代に「星立」表記に変えたが、現在はもとの表記に戻している。明治26年、八重山を探検した笹森儀助が、マラリアのために遠からず廃村になることを予想した八重山の18の村々の中で、ただひとつ絶えることなく存続しつづけた村である。国指定の天然記念物「星立天然保護区域」がある。祖納と並んで「節祭(シチ)」の芸能が、国指定の重要無形民俗文化財となっている。

### 15 白浜(しらはま)

もともとは祖納村の苗代があった場所。明治末ごろから炭坑開発が行われ移住者が増えていった。戦後は、仲良川流域からパルプ材を切り出す事業で活況を呈した。白浜港は、舟浮や網取への海路の入り口で、1970年代までは石垣島からの定期便も入港した。旧暦5月4日(ユッカヌヒー)に「海神祭」を行っている。

### 16 船浮(ふなうき、フネー)

舟浮とも書く。1637年の記録に網取と並んで登場する。船浮湾は、まわりが屏風のように囲まれてしかも水深が深い良港で、日露戦争の時に東郷平八郎海軍大将が上陸したことがある。「船浮のヤエヤマハマゴウ」は沖縄県指定の天然記念物。美女カマドマと役人の悲恋を歌った民謡「殿様節」の碑がある。「カマドマのクバデサー」の木は、竹富町指定天然記念物。

## 17 崎山(さきやま、サキヤあ)

大字崎山に属する。ここにはかつて3つの村があった。

網取(あみとり、アントゥリ)。1637年の記録に船浮と並んで登場する。昭和46(1971)年廃村。その後、東海大学の研究拠点となるが、現在は常駐職員がいない。

崎山(さきやま、サキヤあ)は、1755年波照間島と慶田城村からの移民によって創立された。ふるさと波照間を思う心情を歌った民謡「崎山節」がある。昭和23(1948)年、廃村。

鹿川(かのかわ、かヌカ)は、網取とならんで古い村である。西表島で唯一南に開けた湾に面している。美女ナサマの登場する民謡「御原越地(ウファラクイチ)節」が伝承される。明治44(1911)年、村をあげて網取の東側の内田原の浜に移転するも、大正2年(1913)年廃村(安溪他、2017)。

## 第4節 人口動態

現在残されている史料をもとに、17世紀半ばからの西表島の人口動態を追ってみよう。データの無い時期もあるが、線グラフにすると図5のようになる。下側が西部、上側が東部の人口である。図からは、西表島の人口が4000人を越えた2つの山と2つの谷底の時期があったことと、下向きの矢印で示した、短い期間に急に人口が減ることが3度あったことがわかる。

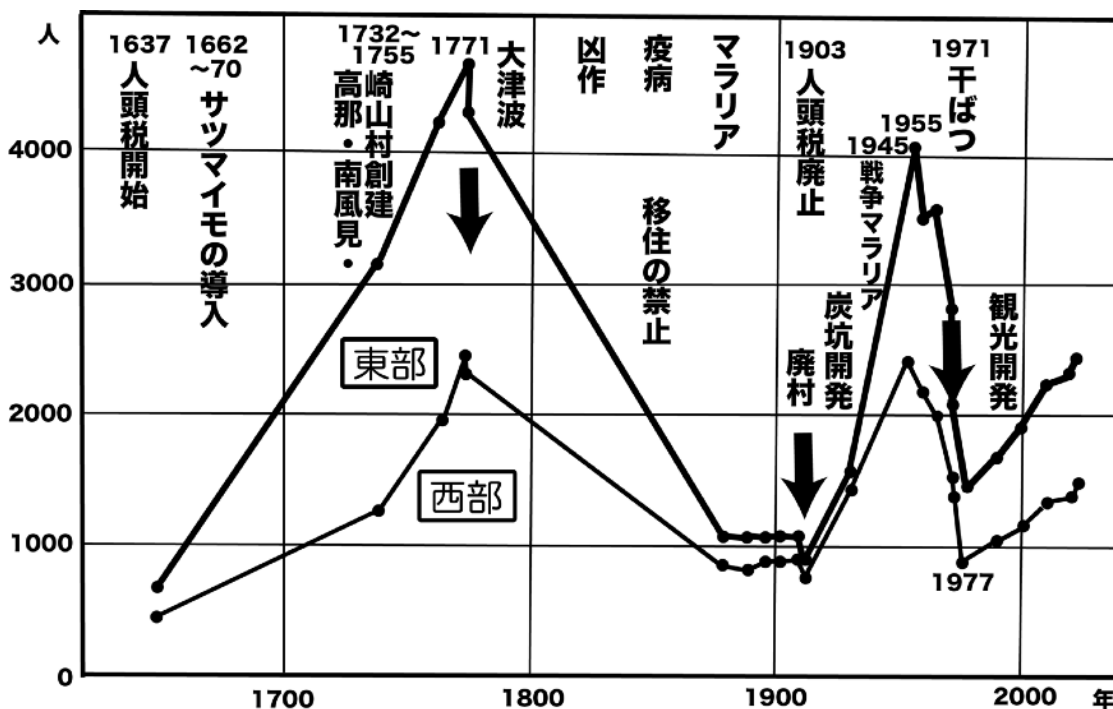


図5 西表島の人口変化の歴史

西表島の全体の人口がわかるもっとも古い1637年の史料では、当時古見村に属した鳩間村と「ひげ川村」があわせて30人とあり、船浮村も2重に数えているため、実数はこれより数十人程度少ない可能性がある。上側が東部、下側が西部の人口を示している。

薩摩藩の琉球王国支配が開始された1609年のあと、1637年から、宮古八重山の人頭税が始まった。非常に過酷な税だったという言い伝えにもかかわらず、17世紀から18世紀後半にかけて、八重山全体で人口は非常な勢いで増え、2万8896人に達していた。西表島でも、1637年から100年たらずの間に、



人口は3倍以上に増えて3000人の大台に乗った。これは、人頭税として米や織物を差し出した上になお、これだけの人口増を支える食料生産ができたことを示しており、17世紀後半のサツマイモの導入による栄養状態の改善が寄与した可能性がある。西表島の周辺の島々ではとくに人口増加が著しく、西表島への移民によってその解決が図られた。1732年創建の高那村へ小浜島から600人から700人、1734年創建の南風見村へ波照間島から400人、1755年創建の崎山村へ波照間島から200人など、少なくとも1200人以上の人々が強制的に西表島へ寄百姓として移民させられた。このようにして、1771年の八重山地震による大津波の直前には、西表島の総人口は、4596人に達していた。

大津波によって、八重山では石垣島東南部を中心に、およそ3分の1にあたる9313人が溺死または行方不明となったが、西表島は、石垣島に公事出張させられていた人々の多くが帰らなかったものの、合計で324人が失われるという比較的少ない被害で済んだ。津波後の人口は4272人で、人口の18%にあたる151人が犠牲になった古見村を除けば、直接の人的被害はそれほど大きなものではなかった(牧野、1981)。しかし、津波によってたくさんの耕地が失われ、その後も、肥沃な土壤が失われたことによる飢饉と人間と牛馬のさまざまな疫病の流行などが繰り返しておこって、人口は減り続けた。それでも人頭税制度のもとでは、居住地選択の自由はなかったのである。大津波から1世紀ほどたった、琉球王国末期には、八重山の人口は、津波前の約3分の1の1万人ほどになってしまう。西表島でも、全部で1000人ほどと、大津波前の5分の1程度になり、とくに東部における人口減少が著しいことがわかる。人口停滞期の明治26(1893)年に西表島を訪れた笹森儀助は、その原因を、風土病マラリアと過重な人頭税の負担に求めている。咸豊6/安政4(1857)年、西部の上原に黒島から150人の寄百姓がなされたが、焼け石に水の状態であったようだ。

明治36(1903)年に、人頭税が廃止されると、住民はマラリアのあるいわゆる「有病地」を離れることができるようになり、数年で廃村が次々に生まれた。廃村にともなって島外に移転する者もいたことから、大正時代のはじめには、西表島は総人口900人を割り込んだ。これが、図の上の2番目の落ち込みである。このように人口が希薄であることに着目して、大正6(1917)年1月、光田健輔は、全国からハンセン病患者3万人を西表島に集めて「絶対隔離」する計画を後藤新平内務大臣に提出したが、西表島にはマラリアがあったために、内務省は第二候補だった瀬戸内海の長島を選択した(原田、1989)。明治末から炭坑開発が西表島西部で行われ、昭和5(1930)年の国勢調査では、鉱業に従事する人口が、竹富村で男419人、女10人であったが、このほぼすべてが、西表島西部の炭坑労働者と経営者だったと考えられ、グラフの上で西部地区の増加が著しい時期にあたる。1935年から36年にかけての最盛期に、西表炭坑関係者の人口は1400人に達して、地名のところで述べたように、内離島は、八重山でもっとも人口密度が高い島となった。

グラフには表現されていないが、戦争中には、島の各地に軍隊が駐留し、船浮集落のように要塞建設のために、一村あげて移転を強制された集落もあり、そうでない集落でも山中に仮小屋を作って空襲から避難する生活を余儀なくされた。また、免疫をもたない者が罹患すると致死性の高い熱帯熱マラリアがある西表島だったが、西表島東部の南風見・古見地区は、熱帯熱マラリアを媒介するコガタハマダラカが多く、感染の可能性の高い場所への強制移住によって多数の死者が出る戦争マラリアの悲劇を生んだ。戦後島外からの移民の中に、マラリア罹患者が多く出たことから、1957年から住居へのDDT残留噴霧を柱とするウィーラープランが実行されて、1961年の5人の患者を最後に西表島のそして沖縄県のマラリアは根絶された。歴史的に西表島の東部での人口減少が西部よりも著しかった理由の一端が、マラリアの種類がちがいにあったことが理解できる(崎原他、1994)。

戦地からの帰還者、農地の開拓と食料の生産にたずさわった移民、米軍の伐採と採炭事業などの従事者によって、1955年に西表島の人口は4027人に達した(国勢調査)。1960年に実施された総合調査に基づく西表島開発計画の中で、マングローブをすべて伐採して水田と養魚池にする構想も予算案まで具体的に検討されたことがある(安溪、2011)。その後は、高度経済成長が始まった日本とはうらはらに、竹富町の島々では、医療と高校以上の教育の機会が得られないために島を離れる人々が増えた。網取村が廃村となった1971年から始まり200日に及んだ大干ばつと1972年9月の台風被害によって、サトウキビ作は壊滅的な打撃を受けた。そのために農地を手放して離島する人が多く、1971年から72年にかけて、島の人口が一挙に30%も減るなかで、日本への復帰を迎えたのである(本巻の過疎の項を参照)。

西表島の過疎化は、1977年3月の人口1448人をもって底を打ち、その後は徐々に増加に転じた(竹富町ホームページ)。その年の8月に明らかになったのが、ドイツの動物学者ライハウゼン博士による、西表島をヤマネコの楽園とするため、住民を全員石垣島へ移転させて、若干のレンジャーだけを島に残すという提言であったが、日本政府がこの提言に耳を傾けることはなかった(安溪、2011)。

1990年以降の西表島の人口の増加は、主として観光業に携わる人々の移住によっている。竹富町全体でみても、第3次産業への就業者割合は、2000年に60.9%、2010年に73.9%、2015年に78.2%と増加している(国勢調査)。観光客も、竹富町全体で年に100万人を少し上回る程度の入り込みがあり、そのうち約3分の1は西表島を訪れる。東部と西部の比率は3対1程度である。新型コロナウイルスの影響で、2020年は観光客数がほぼ半減したのだが(竹富町ホームページ)、従来の生き方の根本的な見直しが必要と迫られる今、耕作放棄地を減らしつつ、かけがえのない自然環境を守り、豊かな文化を継承しながら、持続可能な産業としての農業・牧畜・漁業と観光業に従事する居住人口と観光などで訪れる交流人口の適正なバランスを探し求めることが、これからの西表島の地域づくりの課題であろう。

## 引用文献

- 安溪遊地、1977「八重山群島西表島廃村鹿川の生活復原」伊谷純一郎・原子令三編著『人類の自然誌』雄山閣
- 安溪遊地、1986「西表島の地名」『角川日本地名大辞典47 沖縄県』角川書店
- 安溪遊地、1989「西表島における生活と自然に関する総合的研究」『季刊環境研究』75号、環境調査センター
- 安溪遊地、1994「間違いだらけの西表島の地名」『情報ヤイマ』9月号、南山舎
- 安溪遊地、2011「足もとからの解決——失敗の歴史を環境ガバナンスで読み解く」湯本貴和編『日本列島の3万5000年——第1巻 環境史とは何か』文一総合出版
- 安溪遊地他、2017『廃村続出の時代を生きる一南の島からの視点』南方新社
- 石垣市総務部市史編集室編、1991『慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸締帳』石垣市史叢書1、石垣市役所
- 喜舎場永珣、1967『八重山民謡誌』沖縄タイムス出版部
- 崎原盛造・西貴世美・當山富士子・宇座美代子・平良一彦、1994「第2次世界大戦中琉球諸島に流行したマラリアに関する再考察——とくに八重山群島を中心として」『民族衛生』60(2): 67~84
- 笹森儀助、1982-1983『南嶋探験—琉球漫遊記』全2巻、平凡社
- 仲松弥秀、1977『古層の村—沖縄民俗文化論』沖縄タイムス社

原田禹、1989「西表島と光田健輔」『南島史学』33: 44-62  
東恩納寛恂、1950『南島風土記』沖縄財団・沖縄文化協会  
星勲、1981『西表島の民俗』友古堂  
星勲、1982『西表島の村落と方言』友古堂  
牧野清、1972『新八重山歴史』著者発行  
牧野清、1981『改訂増補・八重山の明和大津波』著者発行  
宮良当壮、1930『八重山語彙』東洋文庫  
琉球大学ワンダーフォーゲル部編、1972『南海の秘境 西表島』琉球大学ワンダーフォーゲル部

安溪遊地(あんけい・ゆうじ)